

【研究論文】

興善寺山門と丸岡城遺構

国京 克巳^{*1}

1. はじめに

丸岡城の遺構といわれる門が、福井県内外の住宅や寺院にあるといわれている。しかし、その詳細な調査がおこなわれておらず、その実態については定かでなく、言い伝えに留まる。そこで、前稿ではその一つである坂井市丸岡町野中山王にある高椋家住宅の表門を実測調査し、さらに古絵図などを検討し、その信憑性について検討した。その結果、丸岡城の不明門が移築された櫓門であることにほぼ間違いのないことを明らかにした¹⁾。石川県小松市松任町85にある浄土真宗本願寺派興善寺の山門も福井県坂井郡丸岡町（現坂井市）にあった丸岡城の裏門を移築したものと伝えられている。しかし、この山門も本当に丸岡城の遺構であるのかどうかについての調査や考察がなされたことを管見では知らない。そこで、本稿は興善寺山門を実測調査し、言い伝え通りの丸岡城遺構の城門である可能性を探るものである。実測調査はまず簡単な外観による事前調査を平成28年7月15日におこない、その後本調査を同年11月23日、補足調査を平成29年2月25日に実施した。本調査は福井工業大学建築生活環境学科吉田研究室および多米研究室学生の協力を得ておこなわれた。

2. 興善寺山門

2.1 現状

興善寺はJR小松駅北900m、県道101号（旧北国街道）の東側に位置する（図1）。敷地正面中央に西面して山門が建ち、その正面奥に本堂、その南に庫裏がある。山門は一間の切妻造棧瓦葺の薬医門で、その左右に脇塀をもつ（写1～4、図2～4）。薬医門は間口2.7m奥行き1.8m軒先で約3.5mの高さ、両開きの扉を入れる。右脇は潜り戸をもつ瓦葺塀と、やや高さを下げて手前へ、さらに右へ矩折れとなる銅板葺の木造塀からなる。左脇は右の銅板葺塀と同じ仕様の直線の塀である。銅板葺の塀は明らかに薬医門とは部材が新しく、近年に造られたものである。

礎石は本柱では笏谷石の切石（下端48cm×41cm 上端43cm×35.5cm）とし、控柱では近隣産地の凝灰岩切石（下端40cm 角上端31cm 角）の上に花崗岩製の礎盤が置かれる。花崗岩の礎盤は明らかに近年のものである。本柱礎石の背面には軸吊り扉の軸受け穴が彫られ、右本柱には右脇塀の潜り戸の軸受け穴もみられる。右礎石は背面の幅14cm程を、左礎石は軸受け穴周囲を幅10cm角程で欠き取られる。右礎石の軸受け穴周囲は、軸受け穴を2ヶ所もうけたためか破損している。いずれの軸受け穴も当初からのものではなく、礎石を扉の藁座とするために改変したものである。本柱は正面30cm奥行き19cmの長方形で、角面8mmがとられ、風蝕はそれほど大きくない。控柱は17cm角で、柱頭に粽をとり（柱脚はわずかにある）、柱四隅を几帳面取りとし、風蝕は本柱よりさらに少ない。本柱間に冠木を置き、その上に女梁、男梁を置いて、出桁・軒桁を受ける。本柱と控柱は男梁の他に二段の貫（幅7cm×成16.2cm）で固める。冠木は幅37cm成19.5cmで、すべての角に几帳面をとり、女梁は幅14.5cm×成18.1cmで両先端を絵様繰形とする。男梁は幅16.2cm×成15.4cmで、本柱真から手前に75cmの所で出桁を受け、背後の控柱上まで架け渡される。男

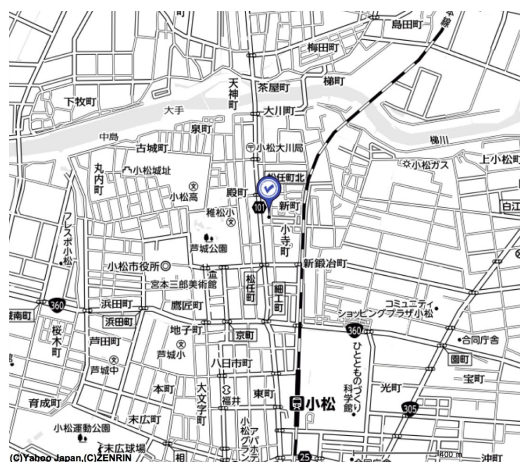


図1 興善寺の位置

（上を北とする 地図はYAHOOより引用）

^{*1} FUT 福井城郭研究所 副所長
E-mail: kunikyo@f4.dion.ne.jp

梁先端に出桁（幅 16.2cm×成 18.1cm）、控柱上に軒桁（幅 16.3cm×成 18.1cm）を置く。軒桁下部の控柱間に、袖切・絵様・眉欠・鯖尻・錫杖彫りのある虹梁（幅 14cm×成 25cm）を入れる。これら部材の樹種は桁を除きいずれもケヤキ材を使用する²⁾。男梁・出桁・軒桁で囲まれる部分を格天井とし、スギ板を張る。軒は軒出約 89cm、幅 6.1cm×成 5.4cm の化粧垂木を約 5 寸勾配に 29.2cm 間隔で配置する半繁垂木である。切妻屋根は約 7 寸勾配で、越前棧瓦葺とし、両端に鬼瓦を置き、棟に葺と瓦を張る棟積みをもうける。越前瓦の色は赤色系ではなく、紺青から銀鼠に近い色で、瓦はそれほど古いものではない³⁾。妻には箕甲を付けて掛瓦を葺き、丸瓦 2 列を置く。軒先瓦や軒先丸瓦は巴紋を使用し、鬼瓦には特別な紋はない。妻飾りは懸魚をもうけず破風板のみで、太瓶束に大斗・花肘木を載せた板張りとする。小屋組は男梁上に太瓶束を立てて化粧棟木を受け、出桁や軒桁上に立てた野束と化粧棟木に登り梁を架け渡し、その上に野母屋を置く。野垂木は化粧棟木上に置いた野棟木と野母屋に架け渡す簡単な構造である（写 5）。

両開きの扉は縦格子の骨組表面に縦板を張り、その上部を透かした構造とする（写 6）。このような縦格子の骨組の扉は城郭の門によくみられる形式であるが、横板張りではなく縦板張りとなる。扉は軸吊りで、上部を本柱と楣に木の藁座を打ち付け、下部を本柱礎石に円形の穴を彫り込めて軸受けとする。扉吊り元の縦框（回転軸）の R 面は、藁座穴あるいは礎石の穴に入る軸受け部分にしかみられない。框・棧は針葉樹（ヒノキ系、下横框はケヤキ）、扉板はケヤキである。縦框は至る所に釘穴、欠き取り痕、貫通穴、埋木があり、改変されたことがわかる。門は左右の扉吊り元に門受け金具を新しく取り付け納められるが、召し合わせに古い門受け座がのこる。銕金物には下横框の両端に化粧箱金物、前述の門受け座、扉板の四葉座と鋳釘がある。四葉座は欠損が著しく、その欠損部の板には 2 回打たれた釘穴（四角と丸）が確認できる。扉表裏の上部で、縦框と横框の取り付けなどに多数の釘穴痕があり、銕金物が取り付けいていたことわかる。

山門右脇の瓦葺塀は、本柱から 1.14m の位置に 15.5cm×13.8cm の柱を建て、片開きの潜り戸を入れる（写 7）。礎石と地覆石は笏谷石の切石で、礎石は幅 36cm 奥行 26cm、地覆石は幅 16cm である。いずれも本柱礎石と同時期のものとみられる。塀柱とその礎石の大きさをみると、礎石が大きく、元はもっと太い柱が立てられていたことも考えられる。屋根は柱に差した腕木と無目鴨居上の束に差された腕木で出桁を支え、垂木を載せる。屋根は越前赤瓦の棧瓦葺きで、門本体の瓦より時代が古い。軒先瓦や拝み瓦は巴紋を使用し、鬼瓦には特別な紋はない。棧瓦に瓦製造業者の刻印が 4 種類あり、その中の一つ「山に上の字」の刻印はあわら市滝の家上家のものであった⁴⁾。扉は門本体と同じ軸吊り形式となるが、縦格子の骨組形式ではない。扉と塀柱に打ち付けられた杵材は木材の風蝕が著しく、その他の部材は風蝕が少なく、多くの部材が新しいことがわかる。縦横框・横棧は針葉樹（ヒノキ系、下横框はケヤキ）、扉板はケヤキである。

2.2 言い伝え

山門は丸岡城の裏門を移築したものといわれる。興善寺住職の母からの聞き取りによれば、「故人となった檀家さんからの話として、その檀家さんが昭和 5 年の小松大火後に丸岡から大八車に門（部材？）を載せて、小松に運んで来たそうである。その途中、山城では炊き出しを受け、小松市内では電線を持ち上げて通過した」という。興善寺は昭和 5 年（1930）の小松大火前には材木町にあり、火災後の復興で現在の松任町に寺地を移している。その後、復興に際してまず庫裏となる建物を移築し、その後本堂を建てたという。山門はその後の復興といわれる。『小松市市勢要覧 資料編』⁵⁾によれば、小松には明治 43 年（1910）に電灯が灯り、小松大火は昭和 5 年と同 7 年にあった。昭和 5 年の大火が橋北（九竜橋川の北）、同 7 年の大火が橋南であるから、言い伝えの火災は興善寺が橋北の材木町にあった時の昭和 5 年で合致する。また、電灯もすでに灯っており、電線を持ち上げたというのは昭和 5 年あるいは 7 年の大火後のことであろう。火災後にすぐ山門が建設されることはないから、昭和 5 年から数年を経て山門が再建されたと考えられる。近年まで生きておられ、実際に門を運搬した人の話であるから、当山門は丸岡城から間違いなく移築された門とみてよい。

しかし、丸岡城の建物が入札にかけられたのが明治 5 年とされているから⁶⁾、火災後にすぐ移築されたとしても 60 年弱の開きがあり、この門が間違いなく丸岡城の遺構であるとは断定できない。丸岡の一般住宅や寺院などにあったもの、あるいは丸岡城から移築されていたものを再移築したとも考えられる。

2.3 部材の新旧意匠

前述のように当山門に使用される部材は、明らかに新しい木材が多々みられる。それらは冠木や楣から上にある部材と、控柱、虹梁である。この新しい木材で作られた控柱や冠木には、古い本柱にみられるような小さな角面ではなく、大きな几帳面が施されている（写 8）。また、控柱の柱頭には明らかに粽があり、同柱下には礎盤が入れられる。女梁には絵様線形がなされ、一般的な薬医門には入れることのない虹梁が桁下の控柱間に入れられる（写 9）。これらの部材は寺院的な意匠で、火災後の伽藍復興で丸岡から移築された門を寺院化するために新しく付け加えられた部材や細部意匠とみられる。なお、冠木上の部材がすべて新しいということは、この部分の破損が著しくて再用に耐えなかったこと、あるいは小屋組が以前とは全面的に改造されていることが考えられる。

2.4 山門にのこる痕跡

山門の古い部材には改造をおこなったことを示す痕跡がたくさんある。まず、本柱背面の礎石天端から 15cm 上付近の扉吊り元側には、埋木（4cm×6cm）とその周囲に釘穴が 6 本ある（写 10、11）。また、その痕跡より 181cm 上にも同様な痕跡がある。これらの埋木とほぼ同高さの柱正面にもやはり小さな埋木（1.5cm×5.5cm）がある（写 12）。これらは扉を柱に取り付けるための肘壺金物の柱側にあけられる肘金穴で、6 本の釘穴は肘金受座を止めた鉋釘穴である。この肘金痕と同高さの扉縦框には、肘壺金物の壺金に取り付けられていたことを示す縦框・縦棧を横に貫く穴や埋木、八双の取り付けいていた風蝕痕や釘穴がある（写真 13、14）。このことから扉は以前には肘壺で吊られていたことがわかり、礎石に彫られていた軸受け穴が当初からのものでないことと一致する。

ところで、本柱や扉の下方にある肘壺の位置が異様に低い（写 15）。扉の壺金穴痕は上部では扉上端から下に約 48cm にあり、下部では扉下端から上に 24cm の所にあり、肘壺間隔は 181.4cm である。本柱の肘金痕から得られるその間隔も 180.7cm で、扉の壺金間隔と一致し、上下の肘壺間で縮められていないことがわかる。扉では上下の肘壺は一般に上下対称の位置にもうけられるので、当山門は扉の下部を 24cm 程切り詰められたことが推定される（図 5）。同様に本柱でも肘金の取り付けいた痕跡の位置が礎石に異常に近くなっており、柱足元も切り縮められたことがわかる。一方、本柱背面に取り付く下段貫は、貫下部に大きな埋木（成 18.5cm）があることが注目される。上段貫の取り付けには楔しかなく、埋木はみられない。これは柱脚を切り取ったことによって下がった貫をあげたことによって必要となった埋木と考えられる。

扉の銚金物は下横框の両端にのこり、召し合わせと吊り元ではその大きさや仕様が異なる。召し合わせの銚金物は幅が 8.9cm 長さ 24cm、鉋間は 4.7cm である。他方吊り元の銚金物は幅 12cm 長さ 30cm と前者より幅長さとも大きく、赤い錆び止め塗装がのこり、鉋間も 10.5cm と広く鉋数も少なく、鉋は座金付きのボルトとなる。このことから両者は時代が異なり、前者の幅の狭い銚金物が古いものであることがわかる。扉下部の幅の狭い銚金物の鉋とその上部の縦框にある銚金物の釘痕を比較すると、釘位置がほぼ一致している。狭い銚金物は当初の銚金物と考えられる⁷⁾。

さて、扉上部の表裏をみると、縦框に銚金物の釘痕があるのに対して上横框には一切みられない。上横框と縦格子との取り合いの部材相互の風蝕を比較すると、上横框は風蝕が少なく、新しく取り替えられた材とみられる。一方、扉下部の横框は風蝕がみられるが、樹種がケヤキ材で縦框や横棧の針葉樹と異なる。下横框の上面には扉の縦棧とは関係のない不明な埋木が 2 ヶ所、両扉ともにみられる。下横框は雨風に曝されて風蝕が進むことを考えると、上横框同様に取り替えられた可能性がある。なお、扉幅を縮めたかどうかはわからない。この他に右扉の召し合わせとなる縦框の中程に門銚穴の痕跡がある。この縦框裏面には門受け座金物がのこり、表の門銚穴とはわずかに位置を変えて取り付けられている。扉裏面の中央縦棧に門銚穴痕と同受座金物の釘痕が 2 回ある。一つ目は扉表の縦框にある痕跡に対応するもので、当初の銚金物痕である。二つ目は現門受け座に対応するもので、中古の銚金物痕で、細い釘も一部のこっている。扉板には門銚を隠す唄（乳金物）痕や銚穴痕はみられない。しかし、左扉の板継目の隙間から縦棧に 8cm 間隔で上下一列に多数の釘が打たれていた穴が確認できる。これは扉が縦板張りになる前には、横板が張られていたことを示すもので、城郭の門によくみられる形式の扉であったことを示すものである。扉の板止め四葉の下には現在使用される鉋釘以外に 1 回の角釘穴がみられるから、この縦板は転用されてきた可能性が考えられる。以上のように扉は当初横板張りであったものを、中古板を用いて縦

板張りに変更された。この変更時期は門が小松に移築された時期つまり昭和5年から数年を経た時期が想定され、門の主要部材である冠木・控柱・虹梁に寺院風の意匠を用いたのと同じように、城郭風の扉を寺院風の扉に変更するためにおこなわれた改変とみられる。また、扉銑金物も移築時に吊り元側の銑金物が取り替えられたと考えられる。

一方、脇扉柱と潜り戸上の無目鴨居は本柱より新しく、本柱の鴨居取り合いの下側に埋木がある。潜り戸は本柱に取り付けられた藁座と本柱礎石に彫られた軸受け穴で吊られている（写16、17）。しかし、本柱背面の潜り戸側の上部に埋木と4本の長方形に配置された釘穴があり、肘壺の肘金が埋められていたことがわかる。本柱の礎石近くには、同様な肘金の埋木痕や釘穴痕はみられない。潜り戸の背面横棧は上下対象でなく、上横框と同じ形の下横框が見当たらない。また、銑金物が取り付け上横框とその直下の横棧には金物固定の釘穴痕が両端にはなく、それぞれ左端あるいは右端にあるのみである。門金物の痕跡は現状の門位置より低く、潜り戸高さの中央より低い位置にある。このことから潜り戸は高さと幅が切り詰められたことがわかる。この潜り戸も上下対称に横棧が入っていたと仮定すると、扉の大きさは下部方向に約21cm長かったことになる。なお、前述のように本柱下部に潜り戸の肘壺の取り付け痕跡がみられない。このことも本柱下部を切り縮めたことを示している。

潜り戸正面の右縦框に門銑の取り付け痕跡が1ヶ所、裏面の脇扉柱に取り付く枠と縦框や門受け棧に門銑や門受け座の痕跡が3ヶ所確認できる。この銑穴は大きく、門受け座は風蝕して外形がわからないので当初のものである。また、現門金物近くに門銑痕や受け座の外形痕が3ヶ所確認でき、これは痕跡の新しさから移築時の金物とみられる。下横棧の表側両端と裏面の吊り元側に扉隅の銑金物がのこっている。この仕様は山門の召し合わせの下部にのこる銑金物と同じ仕様であり、当初の時期のものともみられるが、鉋釘が扉止め鉋釘や本体扉の板止め鉋釘と同じく異様に大きく、錆び止め塗装もなされており、移築時の可能性も否定できない。正面の縦框や扉板には門銑痕や唄の取り付け痕跡はみられず、板止め鉋釘も打ち替えの痕はない。扉板も張り直されたことがわかる。

脇扉の礎石は脇扉の柱と比較して大きく、本柱側が地覆石に合わせて小さく加工されている。この加工は後からなされたようにも感じられ、礎石の見付奥行を考えると、本柱より一回り小さな柱が立っていたことも推定できる。一方、脇扉の腕木痕とみられる埋木が本柱の正面と背面の現脇扉腕木よりやや低い位置にある。その大きさは幅が同じで、高さは多少高い。このことから土塀の腕木が本柱に取り付いていたことも想定され、この位置に腕木が取り付けとなれば、屋根や垂木あるいは破風板などの痕跡が本柱にのこるはずであるがみられない。このことからこの痕跡は腕木ではなく、破風板・柄振板等何らかの痕跡と考えられる⁸⁾。なお、門の控柱礎石は、その材質が本柱や脇扉柱の笏谷石とは異なる凝灰岩であり、当初から控柱があったかどうかとも上部構造が新しくなっていてわからない。

3. まとめ

興善寺山門の実測調査と、その考察から次のことがいえる。

- 1) 山門扉の意匠と構造が城郭建築にみられる縦格子の上部を透かした建具で、当初は横板張りであった。扉のケヤキ板は後から転用した板で張り替えられた。
- 2) 実際に丸岡から部材を運んできたという人の証言がのこっている。
- 3) 山門の本柱礎石、脇扉礎石、本柱、貫、扉、潜り戸などは丸岡からの移築部材と考えられ、その他部材は移築後に興善寺において改造されたものである。
- 4) 山門の控柱礎石も当初のものとは考えられず、さらに冠木などから上を新しく改造されているので、旧形態がどのような形式の門であったかはわからない。礎石配置や本柱、貫、扉、脇扉の潜り戸の存在と城門形式の扉をもつことから、棟門、薬医門あるいは高麗門の形式であったことが考えられるが、はっきりしない⁹⁾。
- 5) 移築前の門は現在より内法高が24cm程度高かった。開口幅については不明である。脇の潜り戸も縦横とももう少し広く高かった。いずれの扉も肘壺による開閉であった。
- 6) 扉の材種は高椋家住宅表門¹⁰⁾と同じで、框・棧が針葉樹（ヒノキ系）を基本としている。潜り戸の横棧が縦框よりも厚い仕様は、高椋家住宅の表門の扉と同形式である。

7) 鋳金物に移築前のものがのこっている可能性がある。

以上のように城門の遺構であることを示す事実が確認された。確たる証拠は得られなかったが、興善寺山門は伝承通りに丸岡城の城門遺構を用いて建設されたと考えてよい。

謝辞

本稿の執筆に際して調査を快く承諾下さった興善寺住職西浦宗司氏、小松市史編纂室をはじめとする関係各位から資料提供、助言、実測調査の協力を戴きました。また、図面（平面図・立面図・矩計図）は多米研究室学生柳沢隼人君が作図したものを掲載しました。これら関係各位に末尾ながら感謝申し上げます。

注

- 1) 拙稿「高椋家住宅の表門と丸岡城不明門 調査概報」p42~51『FUT 福井城郭研究所年報 2015 NO3』2016.03.31
- 2) 樹種は同定をおこなった訳ではなく、経験によるものである。以下の本文の樹種も同様である。
- 3) 棟付近に多少赤味かった瓦が使用されているが、経年劣化で越前瓦は多少赤身をおびてくる。一般的に赤色系が強ければ江戸時代に遡る。本瓦は紺色よりさらに青系なので大正以降とみられる。
- 4) 『福井県窯業誌』福井県窯業誌刊行会 昭和 58 年 8 月 8 日 p529
- 5) 『小松市市勢要覧 資料編 平成 25 年度』小松市
- 6) 丸岡城天守は明治 5 年に入札にかけられたが、明治 17 年に士族に払い下げられている。『国宝霞ヶ城略史』p11 霞ヶ城保存会 昭和 18 年 6 月
- 7) 残存する扉隅の鋳金物は下横框しかなく、一つも上横框はない。また、後述のように残存する受け座金物は当初の金物ではない。このことを考えると、移築時の可能性も否定できない。これは脇塀の潜り戸金物も同様である。
- 8) 移築当初は脇塀の腕木を想定してあけられたものが、現状のように予定が変わり埋められたと考えておく。
- 9) この他に唐門などが考えられるが、城門では考えられない。
- 10) 前掲 1)

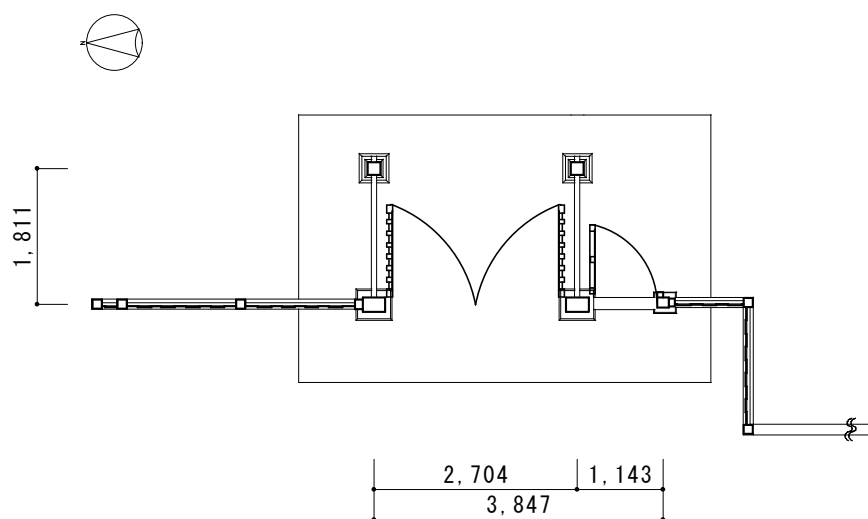


図2 山門平面図 1/100

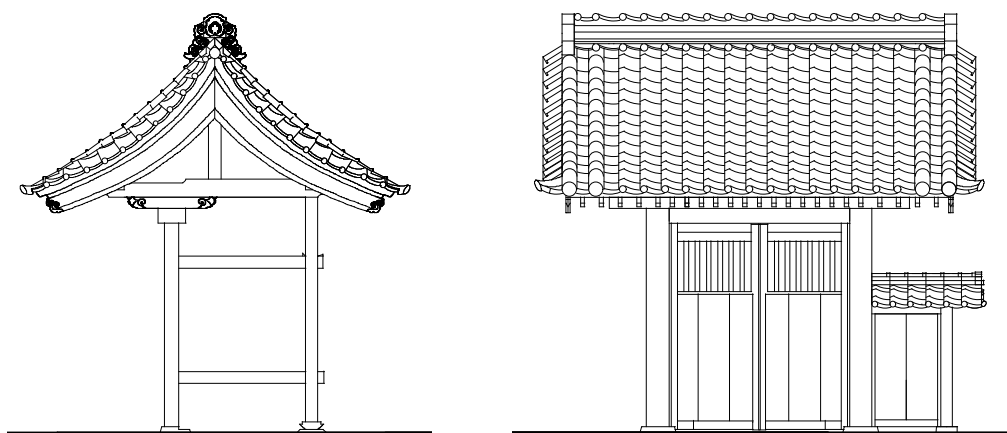


図3 山門立面図 (左：側面図(南)、右：正面図(西)) 1/100

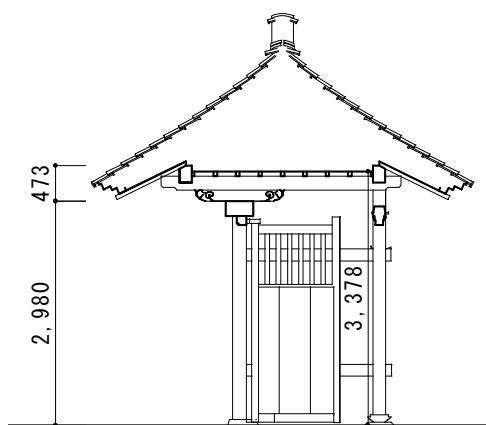


図4 山門矩計図(梁間断面図) 1/100

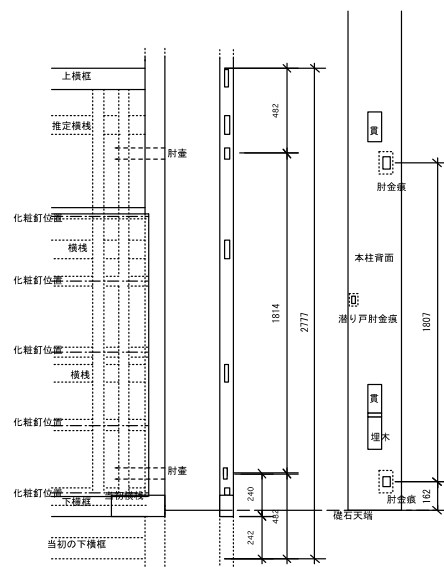


図5 本柱(右)の痕跡・扉の痕跡による想定図



写1 外観（南西より）



写2 外観（南西より）



写3 外観（南より）



写4 外観（南東より）



写5 小屋組（南より）



写6 扉(左)表



写7 脇塀



写9 控柱間の虹梁



写8 冠木の面取り



写12 本柱表の肘金埋木



写13 扉表詳細 (上部の丸印は格子貫穴、下部が壺金穴と鋌痕)



写10 本柱 (右) 裏の肘金と貫の埋木等



写11 本柱 (左) 裏の肘金と貫の埋木等



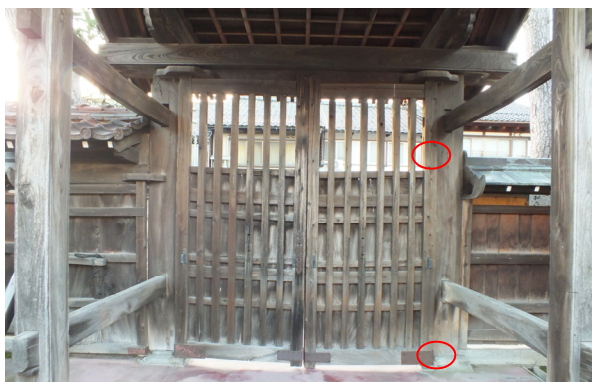
写14 扉裏詳細 (上の丸印は格子貫穴、中の丸印は壺金穴、下の丸印は柱肘金埋木と鋌穴)



写16 潜り戸 (表)



写17 潜り戸 (裏)



写15 扉裏面